

特集「日本の長鼻類化石の研究はどこまで進んだか」にあたって

高橋啓一*

本特集は、2005年6月の化石研究会第23回総会（会場：京都教育大学）の折に開催された同名のシンポジウムの発表をまとめたものである。シンポジウムには、7題の講演と3題のコメント発表が行われ多くの参加者とともに活発な討論が行われた。その内容については化石研究会誌第38巻第1号に講演抄録が掲載されている。

そもそもこのシンポジウムを企画したきっかけのひとつは、亀井節夫編著「日本の長鼻類化石」が発行されてから15年近くが経ち、日本の長鼻類化石の研究の進んだ部分を一度総括するの必要を感じたからである。また、日本からはおよそ10種類もの長鼻類化石が報告され、国内誌に和文での報告が多いものの、欧文中で書かれることが少なかったため、これまで国外の研究者に日本の長鼻類化石研究がほとんど知られていない状態が続いていた。そこで、できればこのシンポジウムをきっかけとして、「日本の長鼻類化石」の改訂英語版ができないものかという思惑もあった。

シンポジウムでの発表は、ゴンフォテリウム類の話題1題（コメント）、ステゴドン類4題（うちコメント2題）、パレオロクソドン類2題、マムサス類2題、微細構造1題と日本から発見される長鼻類化石の広い分野に渡って行われた。これらの発表からは、「日本の長鼻類化石」発行以来、日本の長鼻類化石研究に進展があったことが伺われた。

これまで日本の脊椎動物化石の研究において、長鼻類化石研究は大変重要な位置を占めてきた。それは、中新世から後期更新世までほぼ連続して産出すること、しかもその産出する種が時代ごとに入替ること、また発見される量も国内の脊椎動物化石の中では豊富であることが大きな要因となってきた。このため、進化、動物地理、生層序、地史、組織・微細構造などの

様々な研究分野で貢献してきた。近年は、国際的な長鼻類関係の国際会議（例えば The World of Elephant や International Mammoth Conference）が定期的に開催され、国内の研究者も参加し日本の長鼻類化石の研究を紹介するようになり、国際的な交流も行われるようになってきた。また、アジアやアフリカの各地に行って長鼻類化石を調査するような国際的な活動も徐々に増えている。

このような中で、今回化石研究会誌に特集を組むにあたっては、すでに別の雑誌に投稿を予定している原稿や都合で今回の特集に執筆できなかった原稿を除き、総説3編、原著3編、ノート1編が投稿された。これらの原稿は先に行われた化石研究会におけるシンポジウムの発表内容を中心にして、さらに原稿にする段階で内容が付け加えられたものもある。また、シンポジウムでは発表できなかった故大島 浩氏の遺稿もこの機会に再構成され掲載することになった。これらは、近年進展した日本の長鼻類化石研究の一部を示すことしかできないものであるが、その一方で、これまでの研究のまとめや新知見、あるいはこれからの課題が提起されており、今後の長鼻類化石の研究に大きく貢献するものと思われる。日本の長鼻類化石全般における総合的な著述は、近い機会に改めて出版できるよう努力したい。

最後に、今回の特集をまとめるにあたって、執筆者の方々与会誌の編集を担当している笹川一郎氏の大きな協力があつたことを記したい。これの方々には、シンポジウムを企画する段階からお世話になったが、まがりなりにも7つの論文をまとめて特集とすることができたのはひとえにこのの方々のお陰である。ここに感謝申し上げる。

* 〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091 滋賀県立琵琶湖博物館研究部